秋田県立博物館研究報告第33号　23～43ページ　2008年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.33, 23-43, March 2008

名誉館長館話報告抄

新　野　直　吉*

滝田 樗陰・藤原 相之助・福田 豊四郎・石井　漠・深沢 多市・高橋 正作

はじめに

平成19年度は、講堂において「秋田の先覚記念室」と「菅江真澄資料センター」に関する12回の館話を行ったが、例年の如く前半の館話先覚６人に関する、５月11日(金) 滝田樗陰・５月25日(金) 藤原相之助・６月８日(金) 福田豊四郎・６月22日(金) 石井漠・７月６日(金) 深沢多市・７月20日(金) 高橋正作についての館話６回分を文章化して報告する。

滝田　樗陰

明治15年(1882) ６月28日に父以久治と母よしの長男として南秋田郡秋田手形新町に生まれた男児は哲太郎と名付けられた。父の以久治は町田忠治の兄で、祖父の滝田元敏は通称喜蔵といい文武両道に秀でていた。滝田家は元来檜山に住んでいたが宝永２年(1705) からは能代に居住していた。勇武の祖父は明治戊辰の役で南部藩の侵入軍と戦い、戦死してしまった。その娘であるよしの夫として町田家から入籍した以久治が家督を継いだのである。そして久保田城下の手形に移住することになった。

明治28年(1895) 幼くして近所の神沢素堂の責善学舎に学び、保戸野小学校に通学、卒業して秋田中学校に入学した。136人入学したというが、33年(1900) に卒業の同期生は17名であった。彼の成績は３番だったという。因みに明治13年(1880) からこの33年までの秋田中学卒業生は212名だった由なので、算術平均しても毎年10名ぐらいの卒業という狭い関門であったことがわかる。

33年仙台所在の第二高等学校に進学する。17名の秋中同期生は医科２名・工科4名・文科２名・軍の学校３名の進学で、他は家業に従ったという。勿論彼は文の１人である。荒川村長（今の大仙市協和）であった父は、職を辞し仙台に移住した。明治の父親愛を表徴する話である。若い頃から鉱山関係の勤務を経験していた由で、仙台では鉱山監督局に就職したというから、盲目的な愛からの無謀な辞職移住ではなかった。

36年(1903) 第二高等学校を卒業し、９月東京帝国大学文学部英文学科に入学する。父はまた子と共に東京に移住し、麹町区飯田町６丁目秋田県育英会舎監となった。子への慈愛と期待感の厚いことがわかる。

37年１月から高等師範学校教授上田敏の紹介で「中央公論」編集のアルバイトをする。23歳であった。上田は詩人であるが後には京都帝大教授にもなる。もともと西本願寺の「普通教校」（竜谷大学前身）の秀才達が、時代の欧化主義を反省すべく明治20年８月中学生の大谷光瑞も出席し反省会を開いた。この禁酒と新仏教主義を主張する「反省会」が12月に「反省会雑誌」を出した。外国資料も訳載していたが光瑞が外遊し外国新聞・雑誌の切抜を送附してきていたこともある。雑誌は26年東京に進出し、誌名を32年１月「中央公論」と改名した。彼哲太郎はその種のものの翻訳もした。

大学は入学翌年法学部政治学科に転科していたが、37年10月に記者になり、38年６月阿倍千代子（保戸野小町と称される）と結婚する。樗陰の雅号は高山樗牛にあやかるというから二高・東大の先輩である東北（庄内）人樗牛の後輩であるという理念に由来しているのであろう。初め得意の英語で翻訳などをしていた。英語は、二高時代からではなく、秋田中学時代から得意だったものと認められる。安成貞雄が大館中学時代から英語の才能が豊かで青柳有美を感心させていたということが思い併わせられる。1000部印刷で300部ぐらいしか売れなかった雑誌も38年新年号は上の編集主任が高山覚威に変わったことで増刷されたし、11

* 秋田県立博物館

月の200号は5000部売り切れとなった。

39年(1906) 2月高山主任は退社し、相馬主任となり、実権は樗陰に帰し、この年夏目漱石に初めて「二百十日」を寄稿させたが、漱石は哲太郎を金太郎と呼んでいたというから相当強引だったのであろう。25歳の彼は「中央公論」に小説を載せる方針を立て、漱石の小説らしい小説といわれるこの「二百十日」を掲載、次第に雑誌に文芸性を持たせて行ったのである。

一方徳富蘇峰の知遇を得ていた。結婚前後の頃中央公論の主幹近松秋江から名士の原稿獲得を命ぜられると、第1番に崇拝していた国民新聞社長の蘇峰を目標にその青山草堂を訪れた。何回も門前払いを喰いながら根気よく求め遂に望みを遂げて、大蘇峰の口述を筆記し数多くの寄稿を「中央公論」に受けることに成功した。蘇峰は彼の「其の率直にして坦易なる態度に感じて」、心おきなく交際したという。坦易は坦懐に近い用語である。

42年(1909)「国民新聞」の記者になる。28歳であった。蘇峰社長は将来樗陰を社会部長に予定していたというが、樗陰の名文が害となり時の社会部長千葉亀雄の削除の手が入り、感ずるところあり数週間で辞職中央公論社に戻ったという。それは伊藤博文がハルピンで暗殺された事件を目撃者談に基き意気込んで書いた記事であった。一方では老父の期待空しく、彼は単位を取ったのに、卒業論文を書かない為に東大を卒業することが出来なかった。退学したのである。

大正元年(1912) 31歳で中央公論の主幹となった。既に漱石・幸田露伴・泉鏡花・島崎藤村・国木田独歩・永井荷風・森鴎外・谷崎潤一郎・佐藤春夫などの作品を掲載して来たが、更に正宗白鳥・田山花袋・田村俊子・鈴木三重吉・中条百合子・芥川竜之介・広津和郎等の作品を、二人曳人力車を専用した集稿活動を展開して、広く世に紹介して行った。

大正5年に坪内逍遙の紹介で作品を持って中条が、彼の許に来た時、作品を見るや「一生本当に文学をやっていく気か」と言い、帰宅した彼はその作品を長女に見せて「お前のような女学生だが、偉いもんだ、勉強を怠らないなら伸びて行く人だ。これを読んでごらん」と言ったという話も伝わっている。松村梢風も見出されて暖かい援助を受けた作家であり、深く感謝する文章を書いている。

勿論文学者だけに心を動かしていた訳ではない。吉野作造の「民本主義」という大正デモクラシーの一方を担う新思潮に深い関心を持ち、大正2年に東京帝国大学助教授で留学から帰国した時、大方は通り一遍の会見記事を載せたのに対し、念を入れた準備のうえ彼は数ヶ月後に、博士を尊敬する1人の先輩として訪ねたことを述べたうえで、論文執筆を求めた。気の進まない博士は忙しいと言ったが、口述筆記を承知させ、夜から朝まで精力的に作業し、しかも理路整然と話題になる程の成文を遂げた。

大正7年(1918) 第一次大戦の終了後ロシア革命など欧洲の動揺の波及もあり、米騒動や労働運動もあり、かかる社会情勢の変動の中で吉野デモクラシー理論で、指針を示したいと考えたのかもしれない。大山郁夫についても時勢の中でその思想に理解を示していた。

しかし国民新聞の記者を止めたにもかかわらず蘇峰との理解親密関係は変ることがなかった。水曜会という蘇峰邸の時事評論の会合には、河田嗣郎・河上哲太・石川六郎らと常連として参加し、筆記の巧みさを発揮していた。日本主義と民本主義の平衡性の穏健状態の上に彼は立っていたのであろう。

だから前記の大山郁夫の日本の政治的将来に関する評論を8年1月に誌上に載せているのに、同郷人の小牧近江や金子洋文のものなどは載せなかった。しかも大正2年に「斯くあるべき女」なる作品で発禁になった青柳有美に対しては、6年に「社会主義者を退治せよ」という論を書かせているので、やはり「中央公論」は「大正デモクラシーの牙城」だったのであろう。

この牙城の本社は10年(1921) 6月に本郷西片町の麻田駒之助社長邸から、本郷3丁目東海銀行三階に移り、12年4月には遂に丸ノ内ビルという東京駅前の地に進出した。社運の発展は彼の力の充実と共にあったのである。

但し彼の月給は明治40年以来の30円の侭であった。吉野作造が「評論家として立派に通る才能があるのに、他人に評論を書かせたところに、『中

央公論』を隆盛ならしめ、またジャーナリストとしての成功があったのだ」と評した樗陰に、社主が対応しない筈はない。雑誌売れ行きの歩合が支払われていた。大正元年は4万部だったのに8年は12万部と増大していたので、8年においての取分は、月々2000円だったという。働きに報いる文字通りの「報酬」は得ていた成功者であった。「人の役にたつ人になるには、まず相手の心をよく読んで、それからその人の役に立つように自ら努力していかなければならない」と常々語っていたということである。

12年8月31日に母が急死した際にも、翌9月1日の関東大震災対応の編輯会議を通夜の日に開き5日には早くも平福百穂に使者を遣し、「中央公論」の口絵を8日までに描いて貰いたいと註文している。平成9年(1997) 7月25日の「町田忠治の時代と謎」という館話の折に、主人公が明治28年(1895) 11月に当歳の次男義直の病歿に遭い、その棺の側で創刊したばかりの「東洋経済新報」第2号の「社説」を書いたということを話した記憶があるが、この叔父の印象深い仕事熱心を想起していたのかもしれない。

その直後10年暮には数ヶ月病んだ。喘息を患ったのだが、よく読み、よく書き、よく美食し、肥満多趣味の生活を続けた。しかし13年(1924) 11月腎臓病に罹り、寝ることのできない夜を椅子に寄りかかって家人に背中を擦られて休むほかなかった。

大正14年(1925) 正月からは快方に向い一進一退しつつも5月には出社し、観劇もした。満17歳の長女静江が土崎港町の加賀谷保吉と婚約整い、加賀谷家や親類縁者を演舞場に招待した行事であった。劇場廊下で菊池寛に会った樗陰は「菊池さん暫く」と明るく言った。心晴れていたのであろう。寛もそう感じたらしく、後にこれを、彼にとって「最後の最も楽しい一夕か」と述べたという。

長女が10歳になった時樗陰は、漱石に『女の子十になりけ里（梅の花＝これは1枝の絵）静江さんに　漱石』という色紙を書いて貰った。漱石夫人夏目鏡子『漱石の思い出』によると、樗陰は漱石山房の書斎に毛氈を敷き、自分で墨を磨り紙を伸べ、手を執らんばかりにして要請したという。文人の墨蹟や絵画を愛好して集めた彼は、頼んで書（描）いて貰った書画を次週には表装済ませて持参し箱書を求めるという熱心さであった。だから蘇峰も『滝田樗陰追憶記』に「人に物を書かせる事の巧妙であった事は、君を知る者の通論であらう。私なども君に種々書かせられた。其内平福画伯などの帖もあって、それに悪筆を振ふのは仏頭着糞の恐ありと辞退した事がある」と書くのである。

静江の下には春江・菊江の妹がおり3人の娘を持っていたが、病む父を母と共に摩って看病した。孝心の篤さは父譲りともいえる。樗陰は、結局帝大を卒業できなかったことを無念に思ったであろう。父以久治に対し、心底から申訳無さそうにしていた。「親思い」の深さを察していたであろう、樗陰と親しい真山青果が「親思いの滝田君は総（あら）ゆる悔恨よりも、ただ尊大人（註・父親のこと）に憂慮をかけることが苦しかったらしく、兎に角酔ひさへすれば必ず父親のことを口にして、酒乱のやうに暴ばれ廻った」と『追憶記』に書いている。

大正14年(1925) 8月には、病みながらも自らも枕頭の梅や竹を写生したり、「絵を描きて歌詠みすれば春の日も暮れんとすらしかぎろひにけり」「病癒え病の床のすさびをば追憶（おもひで）に語るは何時の日ぞ」と和歌を詠んだりしていた樗陰の病状が悪化し、心臓・尿毒症・脳症が加わり、10月20日辞表を出し21日20余年勤めた主幹を辞した。10月27日午前10時逝去する。享年44歳だった。

30日に本郷喜福寺で行われた葬儀は、中央公論社の社史で「会葬者は寺の境内に満ち、当代の文壇・画壇・論壇の人たちがことごとくあつまった観があった」と記しているが、「中央公論」の十二月号には各界人士35名による「滝田樗陰追憶記」が特集され、偉大な編集者ぶりが讃えられた。

中央公論社の編集部で滝田主幹の部下として仕事をした木佐木勝の大正8年から14年までの「日記」があり、樗陰の姿が如実に書かれており、彼の周囲の文壇から政界財界の動きが樗陰の言行と共に記録され、彼が時代の動きを勝れた直観力で察し、それを冷静着実に雑誌編集に反映させ、時代の知識人読者を惹き寄せて「中央公論」を発展

させて行った様子が知られるという。

愛嬢を土崎に嫁がせたのも愛郷心であろうが、両国という秋田出身力士の取組に声援を送り、贔屓したのも郷土愛であろう。望岳楼と名づけた本郷西片町の屋敷の庭園に池を造り鯉を泳がせまた銘石を集めたというが、それも故郷の山水を想ったのかも知れない。処が価値ある鯉たちが関東大震災の前日に一斉に死んだという変事もあったという。この邸に美食の上に酒豪でもあった彼は毎年大晦日には文士や画家を招待したという。こうした出版関係者に対する心遣いも、彼を中央公論社長島中雄作が、「千人に一人か、百年に一人の天才的編集者で、『中央公論』にとって最大の恩人」と讃えたというところに結びつくのであろう。

家を継いだのは、「姉妹仲よくして、お母さんの力になってあげなさい」と遺訓された娘達の中で、音楽学校を出た藤原歌劇団のプリマドンナ三女菊江であったが、母に先立ち昭和24年に病没した。なお父以久治は息子逝去の翌年に世を去ったが、夫人千代子は昭和39年まで長生した。名編集者の墓地は秋田市八橋の全良寺にある。

藤原　相之助

仙北郡生保内村相内端刑部屋敷に、慶応3年（1867）12月15日に生まれた相之助は、土地の旧家から分家した祖父作之丞に殊に愛されて育った。生まれた翌4年は幕末維新の戊辰ノ役の年である。南部藩と背中合わせの仙北北浦地方は8月下旬に南部藩軍の侵攻を受けた。村は銃火に曝されることになり、皆が避難した。乳児の彼は藁繞（にょう）に夜具と共に隠された。騒ぎ一過後に大人達は坊やを隠し忘れていたことに気付いてあわてて探しに行くと、彼はスヤスヤと眠っていた。大人達は「この赤ん坊が村一番の勇者だ」と喜び笑ったという。思うに8月は当時の太陰暦であるから、太陽暦では9月になる。この時季前年の藁繞ではなくて、当秋の稲繞だったのではないかとも考えられるが、何れにしても農村で藁を大切にしていた時代に、刈り取った稲であろうと藁であろうとを繞（めぐ）らし積み重ね保存するものがそれである。

この経験は、幼少時に大人から聞かされ「坊やは勇者だ」ということが深い自己認識になったと推察される。少し後年になるが西南ノ役（明治10年）の情報などが伝わると、彼を刺戟したらしく、いわば「武闘少年」になって暴力的行為をするようになったという。「戦ごっこ」少年の度が過ぎたのであろう。

明治6年（1873）頃にこの村に坂口泰助という漢方医が移住して来て手習い師匠を営んでいた。やがて学者にしようとしていた息子の勉強相手（御学友）に坂口は相之助を選んだのである。この年に学齢に達して駒陽（くよう）小学校田向分校に入学した。

教員の待遇不備でこの分校に優れた教師の定着は無かったので、相之助少年は充分勉強もできず木刀を振り回していたのであろうか、慈愛深い祖父も少年を土蔵に入れて諭し、「乱暴は止め読書する」と誓って許されたというが、この学友になってからは、「勉強する」ことに不足も不自由もなくなった。

坂口塾では毎朝5時から四書五経（大学・中庸・論語・孟子・易経・書経・詩経・礼記・春秋）の素読（声を挙げて文章を読む漢学学習の基本）を7時まで勉学した後に、8時から学校の授業に精出し、終業下校後午後3時からまた塾学習で、作詩・復文（読み下した漢文を、元の文にする）の強度の学習を実行する。

更に週2回習字50枚という宿題を課される。こういう規律ある勉強を続けるうちに、生来武骨を好み学問好きでは格別なかった彼も、読書を楽しみながら学力を身に着ける生活を確立するようになり、『日本外史』『日本政記』など世間に流布した頼山陽の著作をはじめ、漢籍の『十八史略』『元明清史略』『史記』『漢書』などの史書、『文章軌範』『唐宋八大家文』などの語文の書を、講義されたり自学したりして、大方通じ、漢詩文の創作も可能になった。

明治14年（1881）卒業すると母校で助教をしたが、角館町の静修塾に通学し不定期ではあったが勉学していた。将来の為にも本格的に塾で学ぶことをすすめる向きもあったが、彼はそれに従わなかった。維新後とはいえ士農工商の身分意識が強く残っていて、士族の子弟達が藩閥政府の専制だ

といって、政権の専横を攻撃したりするくせに、実は平民蔑視が著しく、士族の特権を保持しようとする身勝手振りを見せる矛盾した態度に憤慨したからであるという。

その頃彼は脚気など病気がちで農業に従事することに祖父はじめ家族は不安をいだいた。そして彼が学問を身につけているので、医者になることを提案した。師匠の坂口泰助もそれを支持して、峠を挟んで道の通ずる盛岡の岩手県甲種医学校を推した。相之助は周囲の期待の中で盛岡に向った。

試験は無事終り宿に帰ると、「ソフキトクスグカヘレ」の電報が届いていた。17歳の少年は13里（52キロ）の、峠越えもある夜道を踏破して戻ったが、家に着いたのは翌朝であった。祖父は棺に納まり香華が供えられており、病が重くなった祖父がしきりに合掌祈願しているので、「何を祈っているのか」と聞くと、「相之助の合格を先祖に願っているのだ」と答えた、という祖母の話を聞いて彼は、祖父に取り縋って哭いた。

望を達し合格した彼が医学校で学んで２年19歳の明治18年（1885）、初めての内閣伊藤博文第一次内閣で初代文部大臣となった森有礼の文教政策により、東北地方では医師養成が仙台医学校だけで行われることになった。学校の廃止された盛岡を後にする19年１月、大雪の積もった故郷を発って仙台に向った。

転校するため仙台区（明治22年仙台市になる）北一番丁同心町角の友人の下宿に同宿した。一番の問題は経済的なことであった。月々金のかかる都会生活に対し、問い合わせた故郷からの答は、あと１年分の学資しかないという父親の返事であった。彼の心中や如何である。

これ以上先祖伝来の田畑を失うことは忍びないと考えた彼は決心した。退学することである。転学１年余で退学する彼の届を受けた校長心得の嶺岸大力は「惜しい」といい、本人は勿論惜しいと心中を述べた。それでも手を尽して宮城県庁に職を得て生きて行く手だては確保した。

しかし医者の途を捨てたことは誰が見ても不本意なことである。一緒に入学した生保内出身の医学生は、帰郷した際に「相之助ほどの大馬鹿はいない」と惜しんだ。嘲笑と受け止めたのかその話を聞いた彼は、医者にはなることは諦めたが、別の道で成功して祖母も父母も仙台に呼び寄せてみせると決意して、生保内と訣別することを決めたという。

県庁勤めの時間以外、彼は殆どの時間を図書館で仕事をしていた。平成14年の館話に扱った青年期県立図書館学習に通った伊藤永之介のことを思い合わせる。日参の図書館では読書をし資料を集め、漢詩を「奥羽新聞」に投稿し、匿名の短編小説を「東北新聞」に送稿した。子供の頃から得意だった武者絵や浮世絵風図画の能力を生かした挿絵入り小説であったという。注目されたに違いない。

果たせる哉、東北新聞社長松田常吉が投稿作者を突き止め、入社を勧めて来た。断ると原稿を続けて寄せるように求め、月に２円の報酬を提供することを申し出て、彼に承知させた。実際は県庁の給料は12円だったというから、この２円は軽視できない収入だったと考えられる。

24年（1891）のことである。改進・自由の両党が連合して内閣の対抗勢力となった。松方内閣の内務大臣品川弥二郎がそれに対しいわゆる弾圧を行ないそうな形勢であった。仙台市でも改進党から離れた「東北新聞」を政府側の御用新聞にしようとする動きがあった。そのような段階で相之助は県知事邸に呼び出された。

下級役人の彼を片平丁の邸に呼んだ知事は、後に貴族院議員・男爵になる広島藩出身の船越衛であった。彼は戸惑ったに違いない。知事は明治の国家統治精神などを説いた。多分文筆得意の彼を御用新聞に入れ、然るべき論説や記事を書かせたかったのであろう。

明治25年（1892）２月15日第二回総選挙が行われた。政治の駆引で旧臘25日に解散しての選挙であった。官党（今でいう与党）は敗れ、松方内閣は総辞職した。当然官選知事の身辺にも影響がある。民党（今でいう野党）になった側の「東北新聞」は厳しい立場になる。有能な記者社員が必要になる。

相之助は直接の上司山田揆一収税長から東北新聞社入りを勧められた。呼応して新聞社からも再び入社を求められた。山田は新聞社に入って若し

厭だったら何時でも戻って来い。知事も了解していることなので必ず採用すると口説いた。止むを得ず新聞記者になることを承知した。

だが松田社長に対して、「先祖の霊に誓って」俗悪新聞記者にはならないと宣言し、社長も「是非そのようにして」とそれを認めた。というのは明治期の新聞記者などには、酒の接待や賄賂を受けることで記事を手加減したり曲げたりし、脅喝や脅迫的行為に及ぶ者も少なくなかったのであるから、潔癖な彼は初めから自分の立場を明確にしたのであろう。

特別に大事な社員として社も厚遇したというし、自由党・改新党の御用新聞からは東北新聞とその花形記者に対し、葬り去ろうと包囲攻撃の毒舌による記事を連ねたので、負けん気と正義感で堂々の論陣を張った。毎日休む間もない程の執筆作業を続けることになったのである。野党の演説会場に自ら乗り込むこともあった。当然相手側の壮士から暴力を受けることもあったという。

明治26年(1893) 夏に国民協会の支部を結成すべく、品川弥二郎は西郷従道と仙台に来た。それを迎え対応活躍した時が、政治記者としての彼の絶頂期であったといえる。品川は内務大臣として選挙干渉をしたということで辞職していた。西郷隆盛の弟として著名な従道は西郷吉兵衛の三男(隆盛は長男) で、明治2年山県有朋と欧洲に渡って兵事研究をしていたので、純粋国内主義だった兄隆盛とは違う近代性を身に着け、陸相・農相・海相などを歴任していたから、西郷を擁した品川の野心的行動は強烈なものを内包していたのであろう。品川は長州出身で松下村塾に14歳で入門した経歴もあり、戊辰ノ役でも奥羽鎮撫総督参謀であったから、その後官僚として外交官の経験もある国権主義者であった、相之助の新聞に発表する熱血論も、その知性に背反しない華麗で説得力のある名論だったのであろう。

人々は彼の文章力を高く評価した。政治論説の記者としては最高潮の健筆発揮期と言えるであろう。仙台には勿体無いということで東京で活躍することを勧める声もあがり、実際に東京文壇への斡旋の労まで取った人も現れたという。だが自分の文筆家としての栄達よりも、家族の生活や子供の教育などへの配慮から仙台にとどまったのだという。

そして生い立ちからしておそらく子供の頃から関心のあったに違いない戊辰ノ役について著述を始めたのである。たまたま政局の影響であろう経営不振に陥った東北新聞との関係を絶った彼に、早川仙台市長が市史の執筆を依頼し、寺田宮城県知事が県史や凶作史など編纂を依頼した。彼の歴史研究者としての名声が為政当局にも知られていたということがわかる。

しかし彼の身分は、宮城商事銀行書記とか宮城県知事官房詰とかいう地味な立場に置かれていた。育ち盛りの子供5人をかかえた生活は決して楽ではなかったものと推察できる。収入が不確定であるうえに本人は病気がちであったというから一層そう思われる。

明治45年(1912) 7月大帝と崇拝された明治天皇が崩御、仙台の河北新報社主一力健治郎は8月に先帝追慕の特集を企画し、名文家の相之助も執筆者の一人として選ばれることとなった。

一力が「河北新報」を創刊したのは明治32年(1899) のことである。不偏不党を新聞の理念としていたので、政党機関紙か御用紙の従来新聞とは全く別の中立性がその立場であった。創刊号には一力社主自身が社説を書き、「自由公正」の正しい新聞道を打ち立てること、「人物・文化・産業」を開発し、「閥族官僚」に抑圧された「東北」を振興すること、「民衆に味方」して、「秕政」「党弊」を排除して「人権を尊重する」ことを社是とし、綱領とすると宣言したのである。

明治44年(1911) に先に挙げた『仙台戊辰史』を刊行して、戊辰ノ役について、仙台藩に関わる史料を多量に用い、賊軍とされた仙台藩を中心に東北の諸藩について、極めて客観性に富む是正の論述をしていたこの論客文士が、一力社主の目に叶うことになるのは、必然というべきことである。河北新報が「白河以北一山百文」と、政府要路をはじめいわゆる中央が東北及び東北人を蔑視していたのに反発して『河北』を敢えて紙名としていた立場は、南部の士族でありながらことさらに「平民宰相」を標榜したあの原敬の、「一山」を号としたことと通じている。それは正に相之助の戊

辰史観と同一性を持つものといえるであろう。

特集号の「大葬」を題とする相之助の論は、読者に高い評価を受ける名文であった。一力は彼を社員として迎えることにした。何とその席は「主筆」であったのである。

大正2年(1923) 3月河北の主筆となった彼は存分に筆力を発揮することになる。早朝から夜まで主筆の業務に努める中で、歴史物語や小説を毎日連載したというのであるから、その働き者ぶりは、単に明治時代人一般の律気と精励を超えるものであった。のみならず三日に一度は名「社説」を書き続けたのであるから正に社の柱であったといえよう。

大正5年(1916) 独特の学風で『日本先住民族史』を出版し、柳田國男がわざわざ著者を河北新報社に訪ねるほどの注目を得、名著の聞こえがあった。いうまでもなく著述の持つ「民俗」性を柳田は読み取り評価したのであろう。

大正7年(1918)『平泉情史』という河北の連載小説を渡辺丙午挿絵で大冊として出版したし、小説の中には艶のある場面も巧みに組み込んで娯楽性を持たせたが、三大節などの記念号紙面には追随を許さぬ華麗な名文を載せ、河北の看板として一面を飾ったという。

だが彼は決して派手な記者行動はせず、酒好きで毎晩5合の飲酒も、仲間と店で呑むことなどはなく、帰宅して静かに味う生活であった。「君子」「隠人」などと記者達から呼ばれていたという綽名こそ、その姿を表しているものといえよう。

未だ秋田に来任する以前に会ったことのある三原良吉という著名な仙台の郷土史研究家があった。秋田出身の河北新報柳田和郎記者が、この三原氏から藤原主筆に指導を受けていた記者時代の追憶談を採訪し、「藤原先生はいつも、何十年も着古したと思われるようなモーニングのズボンをはいて、湯屋の番台のような高い椅子にあぐらをかいて坐っておられたので、立ちあがったヒザの所がポコンと丸くなって異様な格好だった。一見、茫洋とした風采だった」と記録している(『秋田の先覚』3)。河北入社以前の苦労から質実な生活信条を身に着けていたのであろう。

彼は「非想庵」の筆名を用いていたが、『非想老人自傳』に、「予の如き愚を以てしても勤倹蓄積を心掛けたればこそ罪にも触れず、悪徳の指弾も受けず、借金も子孫に残さないで死ぬことが出来る。予は県の小吏としても新聞記者としても、銀行員としても正しい道を歩いて来たので、世にも人にも少しも損耗をかけたことがない」と述べているところからも、その信条がわかる。

子供達にも温顔で優しく1回も怒声を発したことがなく、「温厚で人情に篤く、権勢を競わないのが藤原家の本領」と教えていたという彼は『家訓演義』という祖父母・父母からの教訓を纏めた書を残したが、そこでは借金を戒め、蓄財を勧めている。自らも子供の教育にも資すべく、貯蓄を続けていたのに、昭和10年(1935) 預金先の信託銀行が支払不能状態になり「無」になったというが、それは後年のことに属す。

大正9年 (1920) 東京から九州へ旅行をする。一力社主の配慮である。西に「九州日報」の福本日南、東に藤原非想庵と称せられた漢詩の名手であるから、多くの印象的詩篇をものした。中国人の詩文友人も多かったという。彼の『非想庵存稿』に序文を寄せた李時雍は「精神矍鑠　精通漢学　雅壇詩謌　著有地方史多種　爲人磊落　負奇気」と評してその人物学識を評価している。翌10年には東京から北陸道・東海道の視察旅行をした。

大正11年(1922) 東北・北海道を旅した。秋田と岩手は幼少時から青年期に直接生活した故郷であり、学習の地である。単なる記者の眼だけではない深いものを感じたに違いなく、それは文筆に大きな寄与をしたことと考えられる。

12年には海外に足を伸ばすことになる。いうまでもなく社の方針で、その成果を彼の筆に反映させようとの思い入れがある。勿論彼は充分その体験で紙上を充実した。初めから旅行中も一日も欠かすことなく原稿を書いた。自ら「予はたしかに三人分の仕事を平素仕とげ」たと先に引用の自伝で回顧追認している。「下揚子江」「上海公家花園」などを詩った文学作品も生み出した。

昭和6年(1931) 健筆を振るい続け、ついには編集局長まで勤めた河北新報社を退社する。記者として功成ったのである。65歳である。退役しても文筆の力は衰えなかったであろう。

昭和22年(1947) 12月23日、仙台市北五番丁192番地の自宅で病により世を去った。享年81。「辞世」の詩に月明に乗り得て故山に還ると詠んだことに、末子で東北福祉大学教員の藤原勉が家訓によって「近親の睦み」を達成したのであろう、27年(1952) 8月非想誕生碑を故山生保内刑部屋敷跡に建てた。昭和44年(1969) の夏には墓碑もそこに建てられる。正に故山に還ったのである。

筆者が藤原相之助の存在を知ったのは、昭和34年に初めて古代東北史に関する小著『多賀城と秋田城』を書く際に同氏の『奥羽古史考証』を手にした際であった。

福田　豊四郎

明治37年(1904) 11月27日鹿角郡小坂村小坂鉱山字尾樽部で薬局主の豊治と妻しのの四男として生まれる。13人の兄弟姉妹であった。「小坂村小坂鉱山」は明治22年～大正3年の行政地名であり、彼の本名は豊城である。「とよき」ではなく「とよしろ」で画名では、「城」が「四郎」とされたのであろう。福田家は祖父の代に出身地富山から移住して来た。

44年小坂村尋常高等小学校に入学、大正6年(1917) には大正3年から小坂町尋常高等小学校になった高等科に進んだ。小坂町は3年に3557戸で人口は1万953人（昭和25年には2540戸・1万3109人になる）でこの時期秋田に次ぐ人口を擁していたという。

大正8年(1919) 春高等科を卒業し医者を志し上京し歯科医院の書生となったが、合わずに帰郷。11月に京都の薬学専門学校在学中の次兄豊太を頼り、京都に赴く。豊太は明治34年12月23日生まれだった。先ず日本画家浅井直堂の学僕になった。

9年鹿子木孟郎門下となる。鹿子木は岡山県出身で「不倒」を号とし、浅井忠（洋画）らと関西美術院を起こし、肖像画を得意とする手堅い官学派の画家であった。10年上京して川端龍子の弟子になり書生生活。龍子は和歌山県出身で名は昇太郎、中学卒業後洋画を学ぶべく渡米したのに、ボストン美術館所蔵の日本画に感動、帰国して日本画家になった院展同人であるから、福田にとって大きな摂取すべきものを得る機会になったと思う。尚龍子は昭和3年(1928) に院展を脱けるが、同34年には文化勲章を受けることになる。

大正11年小坂で三兄の豊朗が演劇研究会を作り、「父帰る」「青い鳥」などを康楽館で3年間公演した。次兄豊太も演劇に協力していたというから、当然豊城も関与したことであろう。豊朗は明治36年2月26日生まれで、また詩人であった。

翌12年京都の土田麦僊（仙）の弟子である粥川伸二と知友となり、知恩院内に下宿するようになり、麦僊の研究会に毎日通うこととなる。素封家内貴清兵衛が画業学習のパトロンになってくれる。第9回院展に初入選を果たす。

大正13年(1924) 4月京都市立絵画専門学校を受験するが、不首尾であった。それでも秋には、第5回帝展に「水泳ぐ児等」が10月に、第4回国展に「東福寺風景」が11月にそれぞれ初入選した。麦僊は名は金二、新潟県出身で竹内栖鳳の弟子である。桃山時代絵画に傾倒していたが洋画の影響も受けていた。東京高等師範から京都帝大を出て晩年国家主義傾向を持った哲学者・国文学者土田杏村（茂）はその弟である。この年豊四郎は徴兵検査で帰郷した。

14年(1925) には京都市立絵画専門学校専科に1番で合格する、翌15年4月国展の会友に推挙されるが、5月には兄豊太の逝去という悲しみも味わう。夏に粥川伸二、小松均らと裸象社を結成する。小松は明治35年隣県山形の生まれで、川端や土田に師事し、平成元年に逝去するが、昭和60年には文化功労者となっている。京都時代の福田は「秋田猿人」の筆名で新劇運動もする。

昭和3年(1928) 絵画専門学校を卒業する。卒業制作は「雪の一日」であった。川端龍子に再師事する。翌4年2月石橋文子と結婚する。平福百穂を顧問として秋田美術展を発足させ、4月に第1回展を開催する。この時彼は「雪を描く男」「渓流」「冬の町」を出品する。そして6月の第1回新樹社展にその自画像の「雪を描く男」を出品する。自信があったのであろうが、雪とか冬とかという画題が好みでありそれは愛郷心に連なるものであろう。

昭和4年は数え年26歳であるが室の壁を背にして、膝を抱いて脚を交叉させて坐る上着は着けず、

白い毛糸のシャツと黒い編み物のベスト姿の男性は、髪は左から分けてはいるものの油気もないややボサボサで、薄く鬚も見える。何かホッとしたような、見方では気の抜けたような人物像である。とはいっても目は大きくはないが活々としている。壁際には坐り長机が1脚あり、上に絵の具皿と絵筆が「御用済」の如く置かれ、石油ランプも置かれている。仕事が区切りがつき、「どうですか！」と目で主張しているようにも見える。

そして壁には雪の町の一部だろうか家と雪道が描かれた絵が掛けられている。絵の中では手押しの橇を前にして立つモンペ姿の子供が手を懐に入れて、こちらを正視している。この絵をこの男性即ち画家が描いたことを主張しているのだと解かる。この絵は画家すなわち豊四郎の右側に掛けられているが、左側の壁の上部にはデッサンのような坊主頭の少年の上半身像が掲げられている。私の老眼には、雪の絵の中に立つ幼児が少年になった段階の肖像のようにも見える。皆この画家の過去なのかもしれない。

5年(1930) 3月長女郷子が誕生する。故郷を愛する命名なのであると思う。4月第2回秋田美術展に「雪むろ」「初夏村道」の愛郷・望郷の作品を出品する。初夏帰郷して写生画の「早苗曇り」を制作し、8月には前年に結成の川端龍子の青龍社の社友となり、10月第11回帝展にその「早苗曇り」を出品し、小松均・吉岡堅二と共に特選受賞。

この絵は、なだらかの緑の山の麓の田圃に馬に早苗を積み、少年らしい若者が紺の股引の作業衣に笠を冠り、届けるという場面である。乗り手と同じく馬も若いように見受けられる。その若駒がまだ伸び始めたばかりの草を食むべく地上に首を伸ばしている。

田の中では女性が馬の竿を執り笠を冠った男性が馬鍬を押している。夫や兄であるよりは父親のように見える。代掻きは田植をするための田の面を平らにする作業である。少年は降りてから早乙女ら植手に苗を投げ渡す「早苗打ち」をすることになるのであろうが、画面は山近い小坂の田圃であろう。

翌6年8月には次女啓子が誕生する。9月には第3回青龍社展に「山の秋」を出品し、社人推挙を受ける。

昭和7年(1932) 世田谷区代田3丁目766に居住することになる。翌年帝展出品を求めて青龍社除名となる。14回帝展に「凧をあげる児等」を出品の後12月に石井漠・金子洋文らと雑誌「秋田」の同人となる。

9年(1934) 1月1日長男豊土誕生。4月秋田魁新報社講堂で開催の第6回「秋田美術展」に出品する。夏に秋田県内の旅行をし、弘前で個展を開いた。この年に吉岡堅二らと新日本画研究会をつくった。10年夏には秋に嫁ぐ佐竹侯爵長女則子嬢の為に「十和田風景」を制作する。

11年4月、第8回秋田美術展に「秋田民謡四季」という、彼らしい郷里に視線を注ぐ作品を出品する。この4月次男春土が誕生した。

13年(1938) 5月第1回新美術人協会展に「涛」出品。6月父豊治の逝去があったが、9月にはいわゆる当時の支那事変の従軍画家として北支・中支に赴くことになる。大連・新京で吉岡堅二と「二人展」を行った。14年2月日本大学芸術学園美術科日本画講師に就任、9月には3女章子が誕生する。

昭和15年(1940) 11月には「紀元二千六百年奉祝美術展」に出品し意志を示し、翌年陸軍病院でそこに入院している秋田出身兵士の全員を描いて愛郷心を示した。さらに17年1月には在東京秋田翼賛文化聯盟発会式に参加する。世は挙げて所謂「大東亜戦争」への対応に懸命であったのである。4月には従軍画家として東南アジアに赴き9月に帰国した。

昭和20年(1945) 戦況は激烈を極める。しかも日本列島は空襲に曝される事態になった。2月に由利郡西目村に疎開した。そして5月に3男敬土が誕生する。8月には終戦となるが、生活の不自由はなお深刻であった。東京に帰るなど直ぐには不可能である。翌年2月になり帰京する。

23年(1948) 1月に吉岡堅二らと創造美術協会を結成し新傾向の日本画を追究する。2月には4男美土が誕生する。24年にはまた一つの活動を開始する。横手とも縁の深い石坂洋次郎の『山の彼方に』に挿絵を描くのである。この方向はなお続くことになる。26年の林芙美子「めし」の挿絵、文

木下順二の『夕鶴』でも絵を担当する。

昭和28年(1953) 1月胆石のために入院治療したのち帰郷して静養に努めた。29年井上靖の連載小説「あした来る人」の挿絵、30年(1955) 石川達三の連載「親しらず」の挿絵を担当する。5月の第3回日本国際美術展では佳作受賞。31年1月毎日美術賞、2月著書『美しさはどこにでも』(牧書店) で産経児童出版文化賞を受賞する。

3月には武蔵野美術大学日本画科の講師に就任し、4月には「アジア連帯使節団」の一員としてインド・エジプト・ヨーロッパ・ソビエト・中国・ヴェトナム・北朝鮮を訪問する。秋に火野葦平の連載「コマよまわれ」の挿絵担当。翌32年3月井上靖の連載「天平の甍」の挿絵担当。7月毎日新聞社主催「現代美術十年の傑作展」に屏風「滝」(第19回新制作展出品) を出品する。

34年(1959) 5月第5回日本国際美術展に「敦煌」出品。7月十和田から、越後・佐渡に取材旅行をする。11月毎日美術賞十年記念展に「滝」・「小鳥のくる流れ」出品。

35年(1960) 1月第11回秀作美術展に「金華山」が選抜される。6月南天子画廊主催「福田豊四郎展」開催、多数の傑作を出品する。

36年1月井上靖連載「崖」の挿絵担当。6月南天子画廊主催「福田豊四郎－旅の回想－」開催。10月「福田豊四郎近作展」(名古屋) 開催、従来の東京の展示会から地方にも展開して行くことになる。評価・名声の進展である。

37年5月「福田豊四郎画伯スケッチ展」が故郷秋田県の秋田市木内百貨店で開かれるに至った。6月南天子画廊主催「福田豊四郎－雪国を描く－」展が開かれ、テーマに関する12点が出品される。9月には「福田豊四郎自選回顧展」を秋田市立美術館で開く。この年10月母しの逝去。

38年、1月大阪大丸デパートで個展を開き、2月井上靖の連載「楊貴妃伝」の挿絵担当。5月新制作日本画部春季展に「入道岬」を出品する。9月には神奈川県立近代美術館主催「福田豊四郎・上村松篁展」が開かれる。

39年1月「秀作美術展」に「滝」が選ばれる。5月秋田市木内ギャラリーの「第6回在京美術展」に出品し、この月の末に十和田湖に赴く。更に6月には川端龍子を案内して、小坂の実家から十和田湖、男鹿から田沢湖や角館、更に東北南部の蔵王から裏磐梯をドライブした。師匠孝行と自身の取材だったのであろう。7月には若き日修行の京都に文字通り取材旅行をした。

9月第28回新制作展に「ふるさとへ帰る」を出品した。雪国の人々の待っていた春を迎えた歓びが明るく描かれる。風景画の上に、久しぶりで車が動く季節に馬車を操る人の横からの活気が重ねられている。この画伯の心象風景なのであろう。

11月「福田豊四郎・東洛風趣展」が開かれ、「福田豊四郎個展－十和田湖十二景－」も催される。ふるさとの著名大湖に対する還暦の画家の、この年前半の採訪と年来の望郷とが発露したのであろうと思われる。12月には三浦綾子の連載「氷点」の挿絵を担当する。

昭和40年(1965) 1月前年作の「ふるさとへ帰る」が「第16回秀作美術展」に選抜された。獅子文六の連載「父の乳」の挿絵を担当する。2月には金子洋文・石田茂夫などと「秋田」同人の座談会を開き、3月には新制作日本画部展に「北国へ春が来た」を出品ここでも望郷を現わしているようであるが、肝硬変という体調の変化に遇い、目黒の国立第二病院に入院した。退院は8月になる。一方4月武蔵野美術大学日本画科教授に就任する。

41年2月また同じ病院に入院することがあった。しかも4月には師龍子が亡くなる。でも5月には新制作の春季展に「層雲峡」を出品するし、石田画廊で「福田豊四郎展」も開催する。

翌42年にも3月に南天子画廊で「小さい世界」福田豊四郎展を行うし、『福田豊四郎画集－田園抄－村童十二ヶ月』を出版する。7月秋田市協働社ホールの「東京会主催日本画普及展」に出品する。

43年(1968) 5月第8回現代日本美術展に「太陽を告げる」を、6月新制作日本画部春季展に「眼底湖」を出品する。9月には第32回新制作展に「雪国」という雪一色の山と川その中にある数戸の聚落から対岸の10軒程の屋根の見える聚落側に、先の「ふるさとへ帰る」と同じように、人物は、乗物に荷を載せた馭者とそれに続く荷負い人が、重ね描かれている。只前者の春めいての馬車

ではなく雪橇を馬が輓くのである。馬の前は小降りの雪を浴びながら、フード付きマントに身を包み男物のモンペを穿いた学童らしい少年、幾らか年上の学帽で肩に鞄を懸けたモンペ姿の和服の少年、その後を半分程の背丈で赤い冠り物と同色の半天を着た可愛い顔の3歳ぐらいの女児、次にその母親であろう緑の雪帽を冠り、当歳の女児であろう子供を背負いピンクのマントを着て風呂敷包みを下げた若いモンペの女性が、馬の鼻の直ぐ前を歩くという順序の、4人の列が重ね描かれていて、馬の歩みの描かれた下には青く水量のある川の流れが描かれている。この重ね絵は、やはりこの画伯の豊かな個性を表すものであろう。

昭和44年(1969) 3月、残念なことに健康が勝れないために武蔵野美術大学教授を辞任して、非常勤講師の身分となる。それでも5月には新制作日本画部春季展に「平原」を出品する。また第9回現代日本美術展第1部門「現代美術二十年の代表作」に「流れ」が出品される。しかし体調は好転しない。10月には肝硬変の治療に国立第二病院へ3回目の入院をすることになる。41年・42年そしてこの44年の入院である。

昭和45年(1970) 5月三浦綾子連載「続氷点」の挿絵を担当、6月には退院する。9月に南天子画廊で「福田豊四郎展」を開き「わらび」「葱ぼうず」などと共に、絶筆となる「紅蓮の座・池心座主」を出品したが、27日肝硬変のために世田谷区代田の自宅で逝去する。「続氷点」の挿絵は向井新制作協会会員に引き継がれたが、享年67である。

蓮の葉が1葉描かれた中心には水滴の大きなのがあり、それに水浴でもするが如く蛙が斜前方に視線を注ぐ形で1匹描かれ、淡紅色の1輪の蓮の花は、水面から蓮の若葉が顔を出すのを伴う構図で、花輪の真中の黄色な蕊を包む座布団にでもしているが如くやはり1匹の蛙が描かれる。この蛙ははっきりした両眼で前方を見詰めているらしい「紅蓮の座・池心座主」は画伯の悟なのだろうか。

石井　漠

明治19年(1886) 12月25日山本郡下岩川村長面で石井龍吉・ハツの長男として誕生。名は忠純。長面の地名は房住山に長面の3兄弟が住み、坂上田村麻呂に二・三男は殺され、2尺4寸の長い面の首が埋められたことに由来するという伝説を伴っている。

26年下岩川小学校入学、吃音の児童の真似をしているうちに、自分もどもりになり「ポッポ、ポッポ」と囃された。30年に卒業し、森岡尋常高等小学校高等科に入学したが、吃りを馬鹿にされたりして学校に馴染めず、途中の大日山で遊んで帰宅する学業を怠る日々を過ごし、下岩川から通学する同輩もそれに加わるようになったので、父は責任を感じて能代の親類島田治右衛門に預け、31年淳城尋常高等小学校に転校した。

父は文久3年(1863) 牛丸重令の5男に生まれ、石井福治・トセの養子となったのである。祖父福治は維新後久保田から下岩川に移住したもので、酒造業を営んだが不成功に終り、父は小学校教師や営林署の主事をした後、下岩川村役場に勤め、収入役などの後に30年8月下岩川村長の任に就いた。子供の不精勤に心を痛めたのも自然である。旧家の治右衛門は、「男は吃りくらいで卑屈になるな」と彼を励ましたという。実際には彼は唱歌などは吃ることもなく、理数分野は不得意なものの体育や唱歌は得意であったという。

20世紀になった34年淳城尋常高等小学校を卒業し、秋田中学校に進学した。寮生活は寮費3円90銭であった。授業料は80銭だったので、自宅通学者に比べて負担の重さがわかる。大町桂月・高山樗牛・徳富蘆花など愛読していた。朝寝坊で寮監に布団を剥がれる常連だったという。この頃は貫一・三郎・四郎・五郎・六郎の弟が生まれていたというから親の教育熱意が察せられる。

39年(1906) には添田飛雄太郎校長（36年着任・佐竹南家重臣の長男、23歳の明治19年上京21歳独乙に留学憲法と政治学を修めて帰朝）のもとで、38年4月着任の青柳有美（本名・猛、同志社卒）の影響を受けていた。その11月に秋田中学で起こったストライキに参加した。実は34年入学で39年春卒業するはずのところを、英語が出来ずに落第し1年遅れていたのである。剛教育で名を残す校長は20名もの退学処分を行ない、親友奈良環之助や秀才木村謹治らは上京転校した。

父は失職中であった。翌40年には復職するので

あるが、この時は家計が苦しかった。彼は小坂鉱山に就職する。41年９月22日皇太子が小坂鉄道で鉱山に行啓された直後解雇される。父は退職中で５人の弟の下に妹も生まれていた。山村に放校経験の無職者が帰郷しても居るべき場は無い訳なので、翌42年３月に24歳で上京する。作曲家希望であったという。

大町桂月や小松耕輔などを訪ねる。音楽家で郷土秋田の先輩小松を訪ねるのは常識的であるが、桂月を訪ねたのは「中学世界」に「吃りは失望に価しない」と書いていたからだという。勿論桂月は明治２年１月の高知生まれ（名は芳衛）であるが、41年に「太陽」に十和田旅行の文章を書いて注目されていたから、小坂にいた彼が関心を寄せても不思議はあるまい。なお桂月が蔦温泉に本籍を移し間もなく没するのは大正14年のことである。

しかし両著名人の対応は好もしいものではなかった。要するに「作曲家なんてそんな甘いもんじゃありませんよ」という訓戒だったということになろう。方向を変えてやはり六郷出身の秋田人芝白金台町に住む小杉天外の書生として住み込むことができた。桂月の紹介で伊沢修二上野音楽学校長経営の「楽石社」で吃音矯正後に中村千代松の紹介で天外書生となったのであった。

それを知った青柳有美は「あんな奴すぐ追い出せ」と言ったが、かう夫人と小学生の長女３人家族の小杉家では、彼を大事に扱い、「無名通信」という雑誌の発行人にまでした。しかし徳田秋声の作品評で、秋声に理解を示すような発言をし、「徳田は自然主義だが俺は写実主義だ」と天外の気を損じたり、暴露雑誌的な面のある「無名通信」に伊沢修二のことを記事にしようとする天外に反対したりしたことから、居辛くなり小杉家を出てしまう。

三島霜川方に居候するが、寡作の霜川は貧困で１日１食の日も少なくなかった。でも秋声や三木露風やまだ文学青年だった加藤武雄・中村武羅夫・水守亀之助などが集まり、よく近辺の彷徨もした。43年（1910）帝国劇場専属管弦楽部員の募集広告を朝日新聞で見て応募し、数百人の中からの24人に選ばれ、９月晴れて団員になった。ヴァイオリンを渡された時は天にも昇る気持だったのに、なんと貧窮の霜川がそれを入質してしまい、入団２ヵ月を待たず解雇される。

間もなく三島家を出た彼は新潮社で手伝いをしている水守亀之助らが住む牛込弁天町の家に、同居した。新潮社では鴎外・漱石・藤村らを見かけて振り仰ぐが、一方で浅草界隈を徘徊もする生活をする。そのうち44年（1911）８月に明年から開業する「歌劇部」第一期生募集の広告が出る。水守は「一か八か」受けてみるようにすすめる。意見に従って応募し、旧知の管弦楽部員の同情ある働きかけで、山本久三郎支配人が願書を受理して呉れた。

受験には借用の袴を着用して赴いたが、審査員の柴田（後の三浦）環が高い評価の採点をしたので、300名の中から男８人、女７人の15名合格の中に入ることができた。石井林郎の芸名で８月25日から稽古の生活に入り、45年（1912）２月から最初の「熊野」という謡曲をオペラ化した出し物の端役を勤める。招待された秋田中学関係者の中には青柳有美もいたというが、「変な芝居」という皆の評価だったという。親友奈良環之助は吃りを案じたが台詞は無かった。

月給は15円、出演すれば１日に１円の給料だったので、旧来の芝居に出るアルバイトもしていた。帝劇はイタリア人G・V・ローシーを指導者に迎え猛特訓していた。英王室のバレー教師であったローシーは石井に理解を示して、ビフテキ代まで出してくれていた。

大正３年（1914）９月歌劇部を卒業し帝劇の俳優になったが、ローシーのバレーの定型演技指導に疑問を持った。４年、役柄を下げられて不満を感じており、ローシーの６尺棒を使っての指導に反発して反撃殴りかかった為に、９月に帝劇解雇となり、山田耕作（のちに筰）の協力で創作舞踊に取り組む。

赤坂紀尾井坂下の東京フィルハーモニー練習所の二階で山田が作曲に精進し、階下に起居する漠が音楽に体と心が反応するリトミックのリズム感覚を練習していた。当時山田は新婚の上流階級出の郁子夫人と別に住み、時に来訪する程度であった。山田は帝劇歌劇の河合磯代に親しみ夫人と三

角関係にあり、この状況から後援者岩崎小弥太の援助を失って、1日1食にさえなる有様であった。

5年6月2日帝劇での小山内薫の「新劇場」第1回公演に参加し、林郎改め、漠たる前途に対する立場から「漠」の芸名で、『舞踏詩』の「日記の一頁」「物語り」を踊ったが観客は29人であった。

本郷座の26日からの第2回公演では「明暗」を踊ったが観客は30人であった。新聞は「西洋の酢豆腐」と評したという。新劇の間に挟まれて踊るのであるが、思想感情を体の動きで表わす技巧は平坦に理解を得るに至らなかったのであろう。

練習所を明け渡さなければならなくなり、山田は青山に、漠は弟の五郎及び関西出身の友人小森敏と赤坂伝馬町で借り室暮らしをすることになる。やがて状況に意気消沈した小森は郷里尼崎に帰ってしまう。この小森帰郷から動きが生まれた。

東京フィルの奏者から宝塚の音楽教師になっていた原田潤が、小森から情報を得て宝塚に漠を招いたのである。5年11月にも保険協会ホールの踊りが不評だった彼は、招きに応じて宝塚の舞踏教師になったが、長くは続かなかった。小森ら友人と協力して6年(1917) 大阪近松座で「近代舞踏大会」を行い、受けて湘南海水浴場でも催し、大受けであった。京都南座でも「舞踏と音楽の会」を開催して成功、東京で不評だった彼の舞踏は関西では大いに好評を得たことになる。

東京から佐々紅華が来て浅草日本館でオペラをやってくれと申し入れる。自信を強めた彼らは受諾「元帝国劇場専属歌劇部員出演」の看板を掲げた。漠以下、沢モリノ・天野喜久代・杉寛らの「東京オペラ座」の旗あげである。浅草の田原町おでん屋二階に暮らしていたが7年(1918) 春松葉町の二階建の家に引越した。彼女の肩掛けの気に入ったことがきっかけで附合ったモデル嬢で2年間内縁関係だった大場八重子と、正式に2月11日に結婚した。34歳で妻は23歳であった。家の階下は通称公会堂で仲間の出入自由であった。

7年を中心に日本館・観音劇場・金龍館などで浅草オペラは全盛期であった。彼の給料は40円から300円に昇給したし、彼が振付をした松井須磨子は大女優の人気を得ながら島村抱月の死後2カ月8年1月4日に33歳で縊死したが、同じく振付をした踊子の高木徳子29歳は高木陳平に300円の手切金を払える程の身入りであった。ただ徳子は3月30日に急死した。1日3回もの出演で過労だったのであろう。

激しい出演労働は漠その人をも病人とした。彼は過労と深酒の為に肺浸潤に罹ってしまう。妻八重子の6歳下の妹である小浪が入団してその素質を愛で喜んでいた彼も、妻の説得によって県立千葉病院に入院した。8月小康を得て東京に出、日本館で浅草訣別の挨拶を行った。

9年(1920) 春に退院し座員にも脱浅草を告げて、巡業することを宣言する。先ず函館を皮切りに北海道・東北と20日間の興業は大成功だった。好評のうちに東海道・北陸・関西と巡業を続けたが、反面病み上がりの体に無理を重ねていた訳で、大阪の旅館で倒れてしまった。担架で阿倍野の鳥潟病院に運ばれ、幽門狭窄症と診断され大阪の長期公演は中途になった。院長鳥潟隆三博士の執刀で2回手術を受けた。博士は平成9年の7月11日の館話で「鳥潟家の学者達」として話した中の1人であり、京都帝国大学医科大学の2期生外科専攻で助教授の35歳でベルリン大学に留学し免疫学研究で成果を挙げ、40歳で帰朝、大阪医科大学教授から鳥潟免疫研究所と付属病院を開設したのである。

名医の努力で難無きを得たが、函館で生まれても6歳まで花岡で育ち愛郷心の強い鳥潟一族で、右一工学博士の従兄である院長は、秋田県北のルーツを同じくする漠の「気力」を讃えたのみか、一切医療費を求めなかった。1ヵ月入院後12月末に無事退院できた。

10年(1921) 3月30日長男誕生。小山内や山田と名前を考え、父親漠が主張した「音」に合わせて山田が「歓」の字を選んで命名した。九州・山陽を巡業し5月の神戸聚楽座公演を最後に「東京オペラ座」を解散した。稀に出演することもあったが、専ら小浪と舞踏詩研究に没頭していた。

11年(1922) 11月30日帝劇においての豪華な「石井漠渡欧送別舞踏会」の後、かねて心組みしていたヨーロッパ行を決行する。豪華な会とは山本久三郎専務の協力で会場は無料提供であった

が、山田耕作の東京フィルハーモニーが出演、近衛秀麿が第一ヴァイオリン、小山内薫の解説、土方与志の舞台監督というメンバーで、超満員の客であった。12月4日義妹小浪を伴い神戸から北野丸に乗船した。友人益田甫も同行した。船中でも猛訓練を続け、小浪は船客の人気の的であった。

12年1月14日マルセイユに上陸、益田の多田友人の港への迎えを受けてホテルに入る。翌日レビューを観賞して唖然とする程の衝撃を受けた。3人は揃ってパリーへ、そこに帝劇同期の小森敏と松山芳野里がおり、小森のホテルで滞在、25日ベルギー・オランダを経由しベルリンに向った。大戦後で物騒なこともあり、遠回りしたのだという。

ベルリンには当時、外交官須磨弥吉郎、音楽家成田為三、新聞記者池田林儀の3県人が滞在勤務していた。成田がアパートを紹介した。池田も理解を以て遇した。須磨と成田は既に館話で扱ったが池田について概略を述べれば、明治25年由利郡生まれ本荘中学第4期生で東京外語大学シャム語科卒業、講談社を経て大正7年報知新聞社に入社、翌年伯林特派員となった。学究心強く独乙で学位を得、勲章も受ける。第二次大戦中は中将待遇の海軍報道部室長に就任する。戦後に秋田魁新報に「話の耳袋」を2409回連載、筆者も読んだ。

その在伯3県人が中心となり舞踏会を開いた。毎日新聞阿倍真之助社会部長も在伯で理解を示し、「名を売るなら新聞だ」と会食の席で助言した。阿部の紹介で画家でピアノの名手のエーリッヒ・ワスケに合い、ワスケの展覧会の招待パーティーで、彼のピアノで2人は踊ることができた。阿部の集めて呉れた記者たちの積極的報道で、「メランコリー」「ポエム」「淋しき影」の3舞踊が写真入り記事になり、評判になった。報道により一流興行師ジャック・クラーが付き、コンサートホールで「囚われたる人」「若き牧神と水の精」「明暗」などを踊り、アンコールが満員の席から何度もおこり、各新聞は「兄妹の芸術の中に東洋の悩みと試練を感受する。同時に現在の我等の悩みでもある」と賛辞を載せた。土方与志は100円の祝儀を呈した。

4月24・30日、5月10・11日と続演。ドレースデンにリトミック研究に出向いたり、ライプチッヒ、ミュンヘンなど各地からも呼ばれたりした。上田万年が会食に招待して訓戒をし、山田耕作からは100円の送金が来た。

5月末ポーランド・チェコスロバキア巡業にも赴いた。一方祖国日本でも東京で後援会が結成された。9月にはあの関東大震災で妻の実家も焼失したが家族は無事という妻の手紙で、安心してハンガリー・オーストリア・スコットランドからロンドンと巡ってパリーに入った。パリでは石井菊次郎大使が歓迎会を催し、名誉領事ローランにパリでの舞踏公演の対処を託した。パリでも好評であった。遂に大西洋の彼方アメリカからの招きが届いたのである。

大正13年(1924) 10月25日フランスを発ちダグラス号でニューヨークに向かう。河口で自由の女神を仰ぎ最後の外国興行地と感慨を持ち、ブロードウェイに着き、興行師アンダーソンに会うと、「東京」という音譜を渡しこの曲に振付をと申渡された。彼は契約書は「自分の選曲」となっている「下品な曲ではいやだ」拒否したので、数日後2500ドルと旅費を支払い解約された。

自由尊重の彼は金銭に無頓着で経済的には恵まれず、5年からブロードウェイに来て活躍中の帝劇同期の伊藤道郎に連絡して応援を得、カーネギーホールの発表会で好評を得、シカゴ・ロスアンゼルス・サンフランシスコと公演を続け、ロスではイブニング・エックスプレス紙が「石井漠はまことに舞踏界の巨人で……天才舞踏家と同じ偉大な舞踊家」と激賞した。満ち足りて帰国を決めたのであろう。

大正14年(1925) 3月4日、漠と小浪は春洋丸で横浜港に帰着した。後援者山田寛吾の武蔵境の貸家に住み、スタジオを造った。28・29・30日築地小劇場で帰朝公演を行い、大盛況となった。

15年3月大陸に渡り満洲では満鉄庶務に勤務の東海林太郎が大連を案内してくれた。末の妹の栄子も同行し各地で好評を博した。朝鮮半島に移動しては大きな出来事があった。後年の名舞姫崔承喜が入門したのである。彼は「承子」と呼んで入念に指導した。7月日比谷野外音楽堂の公演は弟五郎がピアノを演奏した。満員の人気であった。

8月札幌・秋田・能代と巡業し何処でも好評で

あった。能代では幼友達が彼の舞踊を下岩川の「ささら踊」に似た趣があると評言した。

昭和3年(1928) 東横線九品仏駅前に大地主栗山老から畑地500坪を借り研究所を武蔵境から移した。所在地を勝手に自由ヶ丘と名付けたが、東横社長も便乗駅名を自由ヶ丘にした。また行政も同調して、碑衾町衾の地名を目黒区自由ヶ丘に改めた。

5年石井漠舞踏学校を開校した。文学・語学・音楽・生理などの講師の他に徳川夢声も教えた。男女十数人の研究生が寄宿舎にいた。4年には眼疾を患う難があった。しかも小浪が離団した。彼は運営を小浪に委ねようと考えていた矢先であった。小浪はニューヨークから同船した高原延雄と結婚していて、渡欧時とは心情が変っていたのであろう。数日後には崔承喜も退団してしまう。しかし彼の活動は眼の虹彩炎の禍の中でも舞踏作品300曲余、児童生徒用も約100曲、著作は11冊を世に送り出した。11年(1936) にはまた、妹栄子が盲腸炎で急死する悲しみも味わった。

13年(1938) 4月自由ヶ丘スタジオに石井漠舞踊学校を開き、幼稚部から高等部まで70名の生徒がいた。黒柳徹子も通っていた。この年も恒例のような満洲公演に10月5日東京を発ち大阪梅田公演1週間後15日門司から大連に渡り、新京を本拠に娘のカンナ、大野弘史、和井内恭子らの団員に妻八重子も参加して、清朝粛親王の子である川島芳子の歓待を受けたり、李香蘭ら満映女優に指導したりした。運悪く14年の大陸巡業では、青島に陸軍慰問に行く途中交通事故で重傷を負い、健全だった方の眼の視力も激減した。

16年(1941) 12月8日大戦勃発のニュースの中眼の不自由な彼の代りに八重子が団長で朝鮮・満洲に出発した。17年11月戦時下読売ホールで「石井漠舞踊三十周年記念大会」が盛大に催された。19年帝劇閉鎖で軍や工場の慰安公演をやっていたが、20年5月24日の空襲で施設全部が焼失。8月石井舞踏団15名は盛岡の軍需工場慰問のため宿泊中の花巻の宿で終戦を知り60歳の漠以下皆が泣いた。しかし年の暮に共立講堂公演の依頼に漠・みどり・はるみ・金谷久男(緑川潤)などで応じた。

21年(1946) 羽田のグライダー庫を購入スタジオ再建、中国・九州を公演旅行。22年松本源三郎の助力などで木造二階建スタジオ兼住居完成、進駐軍基地の公演を、旧知の米国帰りでジェリー伊藤の父伊藤道郎なども出演していたので、彼も行ったが、芸術を旨とする彼は基地以外の中部・近畿などの公演を好んだ。26・27年東北巡業。下岩川小学校でも公演秋田弁で懐旧した。しかし戦後巡業は興行師とのトラブルも多かった。27年講和の恩赦で仮釈放になった秋田・網走などの脱獄囚白鳥由栄が、この間に眼疾の漠を案じた手紙を呉れたこともあった。30年紫綬褒章を受け翌年八重子同伴訪中文化使節。36年甲状腺の手術、10月15日「五十周年記念大会」の後、37年1月7日夕「目が見えてきた」と言った後逝去。享年77。

深沢　多市

明治7年(1874) 4月18日、仙北郡金沢東根村字川原田で周吉の長男として誕生。金沢東根村は22年に畑屋村に入るのだが、14年頃中野小学校に入学する。校舎は高橋午山家であり、教師は六郷の人熊谷東市であった。卒業後も勉学を続け、六郷の国学者熊谷松陰直清に和漢の学を受講した。

23年(1890) から24年頃に詩文を高橋午山軍平に学んだという。勿論詩文とは漢詩文である。25年上京して二松学舎に入学して更に国漢学を学ぶ。明治10年三島中洲が麹町の自宅に開いた漢学塾に発している。昭和24年現在の大学になるのである。27年に帰郷して飯詰の江畑酔経学舎に学んだ。学舎には石川鵬斎の「心酔六経」という家蔵の額が掲げてあり、その語に学舎名は由来しているが、六経とは詩経・書経・易経・春秋・礼記・楽記の儒教の重要経書である。

28年(1895) 9月20日歩兵五聯隊に入営。日清戦争に従軍する。戦後29年6月召集を受け30年に除隊する。午山の世話で畑屋村書記となる。従って家業は継げず弟の多光に任せることになった。

33年2月に仙北郡書記に就任し、月俸は10円であった。吏員としては事務に練達していて議員に対しての答弁も極めて巧みであったという。35年6月横沢村草薙岩太郎長女キサと結婚する。

37年(1904) 日露戦争に召集される。38年2月13日遼陽城北で恩賜賞を受けて、凱旋した後に勲

七等青色桐葉章を受け、100円を下賜される。39年4月召集解除となり吏員の任務に復職する。

40年秋田県属となり、県庁に勤務することになる。そして真崎勇助、石川理紀之助などの同好の識者と「秋田史談会」を組織する。これは秋田の地方史研究にとって意義深い事実であった。43年秋田県は県史編纂を始め、長井金風を東京から呼び戻したが、金風は3年で離脱したので中心を失った。44年(1911) 多市は病のため県吏員を辞職するが、翌年復職して県史の仕事に関わる。

大正2年(1913) 4月には県史関係の任務の「天然記念物」の調査に主として当たり、精出していたが、半年程すると12月12日宮城県属に転任することになる。これは森正隆秋田県知事か、牧同県土木部長かの推薦に依るものとされている。

大正4年(1915) 10月に天皇の仙台行幸があり、関係者に御内帑品の下賜があった。当然県吏員の彼も下賜を受けた。感激した彼は11月16日付の「紀恩」という格調整った文章をものした。「明治四十一年玉趾を東陲に枉けさせ、風を観し俗を察し給ふや。(ママ)九月十九日鶴輿秋田県に入る。小臣当時同県に官せるの故を以て、行啓(ママ)の事務に関係することを得たり。駕を県地に駐めさせらるゝこと五日、辺土甘雨に霑ひ、思ひ(ママ)らく生れて亨運に遭ひ、死して遺憾なしと。図らざりき特に内帑の金を賜ふ(ママ)て小臣等の労を犒はせらる。小臣感奮の涙を抑ゆ(ママ)ること能はす、賚を拜するの明日一族を鳩めて祝酒を奉し、至仁至慈の天恩を奉謝せり。本年十月陛下武を東奥の野に閲せらるゝや、途に仙台を過らせ給ふ。小臣時に宮城県に奉職せるの故を以て、亦行幸の事務に干與することを得たり。此の月十七日、及二十五日前後二回の駐駅に際り、鹵簿の森巖を拝し、竜顔の麗かなるを仰ぐ。再、葵藿の鬱懐を暢へ、傾日の宿願を達するを得たり。特にまた内帑の賜を拝す。聖恩天の如し豈感泣せさらむや」(青柳信勝・小田島道雄編『郷土史の先覚　深澤多市』に依る)という中心部分である。「勲七等臣深澤多市謹識」と署名している。明治人の公務員精神が窺える。さらにそれを知人に配って自分の誠意を示したのである。

歴史研究は単に郷土史的な近傍の史跡だけが対象ではなかった。仙台周辺から、大和の古代国家の由緒ある史跡を奈良から吉野にまで、巡訪して、歴史研究を深化展開したのである。そのような中で「紀恩」が京都府知事の目に止まり、大正6年1月23日に京都府属に転任することになる。31日就任する。

大正8年(1919) 4月18日京都府熊野郡長に就任する。熊野郡は、それ以前の丹波国から和銅6年(713・出羽国が置かれた次の年)に加佐・与佐・丹波・竹野・熊野の5郡が割かれて丹後国が設けられたのであるが、その一番西に位置し西隣は但馬国になる。後世の久美浜町に重なる地域である。彼の人間性からして立派な郡長だったことと察せられる。

もう一面すなわち歴史研究者としての彼にもこの任地勤務は画期的な意味を齎した。彼は喜田貞吉博士の個人雑誌「民族と歴史」の愛読者であった。郡は明治11年から大正12年までの地方制度であり、郡役所に伴う公舎から50mの美浜の海で釣を楽しんだ。夜釣もよくしており、ある夜は大鰻を釣り上げ、戻った公舎の土間で取り外すのにキサ夫人と大苦闘したこともあるという。

海の事情にも通じた彼は、この地で丸子船なる漁船が使われており、それが出雲国の美保神社の諸手船という神事関係の船と似ているというので、その写真を携えて府都に出て京都帝国大学の国史学研究室に喜田博士を直接訪ねて報告したのである。博士はその学問的判断価値を認め、「民族と歴史」11月号の表紙に採用し、加えて郡長に写真の説明もさせるという、博士の郡長理解が成立したのである。すなわち喜田博士と深沢郡長の学問上の結びつきが成立したのである。

行政官としての彼の業績も素晴らしい。日記に道楽として、歴史読み・詩作・釣を挙げているが、それはあくまでも地方行政官としては余技だったわけである。久美浜は紙の産地でもあったが、方式が旧式であった。郡長は業者に先進地として鳥取県の日置村の製紙業を見学させたという。日置郷は『和名抄』にも載る地名で、明治22年から近代村制を採り昭和30年に青谷町に入るが、紙・漆器・売薬なども行われている。因州和紙の名のある紙によるのであろう傘も生産される。郡長に機械力について認識させられた久美浜の業者は努

力、名古屋の博覧会で銀牌を受けることになる。郡長の指導を多たした彼らは傘紙に「多市印」の名をつけたという。

大正10年(1921) 5月11日病気という名目で職を辞して帰郷した。理由は生家で長男の多市が家業を捨てて、親をかえりみないと非難されていたからであるという(『秋田人物風土記〈続〉』)。親孝行を決意したのであろう。

もちろん県が彼の力を需めない筈はない。7月8日「秋田県史蹟名勝天然記念物調査員」を委嘱された。数え年48歳官途を辞すのには未練もあったであろうが、更に悲劇が襲い、翌11年7月11日の夜に家は火災に遭い、勲章の類も、累代の伝来物も、辞令関係書類も総べて灰燼に帰した。

5000余冊の蔵書も、自ら30年苦心惨憺蓄積した記録資料も皆失ったのである。「精神ガ錯乱シタ」(「火災ニ逢ヒシ記」)と記した彼は、資料のままでなく叙述にして置きしかも多数冊(部)存在させる必要を痛感したらしく、12年(1923) 4月18日の誕生日を期して「我村の歴史」なる畑屋村の郷土史研究誌を創刊した。13年10月までに17号を出し、このガリ版による冊子を各方面に頒布した。実は刊行少し前の3月28日に喜田博士が来県して、飯詰村の江畑家に宿泊し彼も同宿して色々話を聞いたというので、それが引き金になった趣もあろうが、創刊号の自序には「奈良師範学校ノ高田十郎君ガ、時々『奈良』ト云フ謄写版雑誌ヲ送ツテ呉レル。差向キコレニアヤカロウ(ママ)」とあるからそういうことであろう。

13年1月「飯詰村史編纂会会報」を発行し、酔経学舎の時代から恩義のある江畑新之助の依頼に応じ、何冊か出したのである。14年(1925) 2月には仙北郡長中里喜一を会長として、田口謙蔵と「仙北郡志編纂会」を結成、調査員となり「会報」作成に当たり、『仙北郡史資料・系図部』第一集などを出した。しかしその2月は寒風の中を生家の家督を弟多光に譲り、役人の退職金まで渡して生家と交渉を絶ち、体一つで後三年駅前藤田宅に身を寄せることになった時期とも重なる情況下であった。むしろこれからはマイペースの研究生活だという踏ん切りがついたのかもしれない。なおこの年には「秋田考古会」も設立している。

大正14年8月1日、前年8月創刊号を出した「小野寺氏研究資料」の4号を出して、小野寺氏研究を進める。この年11月9日横手町有給助役に当選し就任すると、15年沼田平治・細谷則理・大山順造・須田勇助らと『横手郷土史』の編纂にかかり、10月24日横手町役場楼上で喜田博士を迎えて横手郷土史編纂会の発会式を挙行する。また珍妙なこともあった。この年8月7日から「羽後新報」という横手の小新聞に「小野寺盛衰記」を載せ始め271回も連載することになったのに、資料とした足利尊氏文書(横手神明社蔵)とかという物が偽文書であったことが判明、結局全文撤回の広告を出したというのである。近年の東日流外三郡誌事件のような話である。

昭和2年(1927) 6月大曲町で、事情を知らぬ人は前年11月開設の柳田駅の説明会かと思ったという、柳田国男の菅江真澄に関する講演があった。この民俗学の講演は当然真澄とその遊覧記についての熱のこもった話題になった。地方史の研究をしている程の深沢多市が、この話に触発されるのは至って自然の道筋である。自分が火災で史料を失ったことを想起したとすれば「菅江真澄遊覧記」の活字化を考えるのも必然であろう。

更に宮城の『仙台叢書』や岩手の『南部叢書』に当たる秋田県の県史関係資料の叢書がないことに、義憤に似た気持で叢書編纂の決意をしたという考察をする説もある。何れにしても柳田との出会いはこの自律性の秀れた研究者に編纂のことに現実に向かわせることになった。そしてそのことがこの人の秋田県史研究史上の卓越した立場と菅江真澄の遊覧記の研究史に、独自の地位を構築することになるのである。12月26日には柳田国男から深沢多市にそれに関係する手紙も来るのである。

昭和3年(1928) 5月に角館町史考会主催の菅江真澄百年祭遺墨展の記念講演に喜田博士が来秋の際にも『叢書』刊行に関する意見を求め遂に踏み切って、第一巻を6月に発行したとされている。しかし1ヵ月で刊行出来る筈はない。もう完成間近の本の話を喜田博士にし、最終的助言を得たのであろう。3年冬軽い脳溢血になったが、1ヵ月余の病臥で済む。編集顧問は喜田博士、編集と校

訂は沼田平治・須田勇助・細谷則理・大山順造・深沢多市・国本善治であった。国本は深沢の妹の夫で東京在住、積極的協力をしたという。経費は総べて深沢の支出であった。『羽陰史略』と『柞山峯の嵐』を収めており、背文字など赤星藍城の筆であった。

この3年9月には、南秋田郡寺内村国幣小社古四王神社で、秋田考古会主催の真澄百年祭があり柳田の講演があった。そこで柳田講師と話し合った深沢は『叢書』として月・雪・花の三『出羽路』を本集に含み、他は別集として『菅江真澄集』とするような打合せがあったという。実際に『真澄集』の第四巻からは、柳田国男が監修者となっているが、昭和5年7月『菅江真澄集』第一巻が刊行され、同年12月には第二巻が刊行される。

このように矢継早に刊行できたのは、昭和2年9月「菅江真澄翁の遺蹟について」(秋田魁新報)、3年5月「菅江真澄」(史考記念号)・「菅江真澄翁について」(秋田魁)・9月「菅江真澄翁」(東北文化研究)・4年8月「菅江真澄翁の遺書」(魁)などの研究蓄積があったからである。

昭和4年10月28日横手町名誉助役になり、横手町上島崎町に居住する。5年1月母リエが没したが、刊行の進行は続いた。しかも県内の金持など100人は会員になってくれると読んでいたのに会員は江畑新之助1人で、徳富蘇峰や平福百穂は毎月会費を納めるが、県民にはさっぱり売れなかったといい、経済的には経費捻出で悩み抜いていた。

昭和6年(1931) 1月30日病気のため横手町名誉助役も辞任した。それでも4月に『叢書』第七巻・10月に同第八巻を、その間の7月には『真澄集』第三巻を発刊する奮闘ぶりであった。7年3月『真澄集』第四巻を出し、5月7日には上京し柳田国男を訪問する。7月『叢書』第九巻、11月『真澄集』第五巻刊行。8年3月横手高等女学校で郷土史の講演をし、「秋田史壇」「横手郷土史」「続横手郷土史」に執筆する。『叢書』第十巻を4月、『真澄集』第六巻を9月に刊行する。

昭和9年(1934)『叢書』第十一巻を7月、評価高い「小野寺研究資料」十三号を10月に出し精力的活動中12月19日に脳溢血再発20日午前1時40分逝去享年61。成稿していた『叢書』第十二巻は未亡人が刊行したものの、『真澄集』第七、第八巻は原稿で残された。真澄を愛する人々の増加した現在でも、未来社『菅江真澄全集』よりも叢書別集『菅江真澄集』を評価する声もある程である。勿論業績全般についての評価は戦後も高く、没後50年には、千畑の仏沢公園に後輩によって顕彰碑が建てられ、「昭和五十八年十月二十一日　深澤多市先生顕彰碑建設委員会」の名で『酔經堂上談風流　紫水』と自筆跡を染めた手拭が、高野山で落花の山水霊気と一体感を持った「紫水仙史」の漢詩一軸と共に配られた。

高橋　正作

享和3年(1803) 9月7日雄勝郡松岡村坊中で千葉治兵衛・はるの三男新蔵が誕生する。松岡村は明治になると22年山田村の内になり、昭和29年湯沢市の大字となる。松岡鉱山の地である。坊中の地名は寺院との関係を表わすが、天台宗松岡寺に18坊があったという。坊中には修験の山で289メートルの白山があり、山頂白山神社に由緒ある根株を裳裾にしている女神像が祭られている。『秋田の先覚』5では正作が10月28日生れとあるが、これは太陽暦に直してのことである。尚グレゴリオ暦では10月22日である。肝煎千葉家の子として幼少時から父に四書五経の素読を受け学問を身につけた。農業研究についても関心が深く、文政2年には18歳で桑の改良栽培も行った。農業方面も含め優良青年の評判が地域に行き亘っていた。しかも習得した知識や技術を社会に役立てようと人々に分け与える姿勢が身についていた。

文政7年(1824) 松岡から雄物川の対岸になる桑ヶ崎村の肝煎高橋理右衛門の婿養子になる。妻になった同家の長女ナミは6歳下であったが、美しく優しい女性であったという。だが環境は厳しかったようで、「懶けものが多く、人心がすさんで争いや、揉めごとが絶えなかった」(『秋田の先覚』5)という状況が記されている。それどころか支流高松川の合流点の地は洪水の常習地帯であり、耕地は荒廃し年貢完納も連年不能という村落だったとされ、最近の研究でも「廃村寸前の状態」と表現されている(簗瀬均「飢饉との闘い」雄勝の肝煎高橋正作伝・秋田魁新報)程である。

僅か2年後24歳の若さで肝煎役を引き継ぐことになる。まだ42歳の養父が如何に婿に対する評価が高く期待が大きかったかが察せられる。しかも養父理右衛門はこれから尚42年間も健在だった。勿論若い肝煎のバックアップを有効にしたに違いない。荒廃地の開拓再耕作を若い肝煎が提示したのに、村人は洪水があるので開拓は無駄だという反応を示した。経験論としては当然であろう。だが、この文政9年(1826)には長男貞蔵が生まれたし、彼自身も農事視察学習のため東北・関東・北陸まで旅し知得する処も大きかったので、決意を固めた青年肝煎はたじろがなかった。

開墾費用は高橋家が負担し、作業をした労働賃金も高橋家の私財で支払うという説得をした。彼の情熱は翌10年には成果を挙げた。高橋家の負担は莫大であったが、藩も成功と奉仕的負担を認識し評価した。文政11年開墾事業の業績を賞し、玄米100俵を賜与した。高橋父子はその玄米をも村人に分かち与えた。また田地開墾と併行して植林も進めていた。すなわち地域の山林も荒廃していて、薪炭材も存在しなくなっていたからである。山林を10年に分与してそれぞれ植林を指導した。

文政13年(1830)には後年「長寿自養篇」(明治23年)で、「我が身を削り」と述懐するような苦辛努力の結果、田地30町歩が開墾で復活、回復地の元の状態確定のものは原所有者に分与した。植林された山も荒山が次第に杉山に変って行った。高橋家の復興事業への私財提供は米500俵にのぼったという。この年は実父治兵衛が57歳で逝去する悲しみもあったが、それにも耐えて東北・関東の老農を歴訪して学習した。ことに出羽米沢の植木四郎兵衛の許に滞在して学び、有用樹木の漆と桑の苗木を馬18頭駄載分500万本も運んで帰郷した。しかもそのうち10万本は藩に献納したというから、彼の博愛・奉公の卓越した精神態度が知られる。桑の改良は秋田県南に養蚕が盛んであったことと無関係ではあるまい。

天保4年(1833)大飢饉で横手盆地も傷手を受け、よく知られている北浦一揆も盆地北東部では起こったのである。この村でも食糧払底で危機が迫って来ていた。壮年に達した肝煎はこれを救うべく、450俵を用意する為の費用を高橋家の田畑山林を抵当に、藩当局の西馬音内陣屋から借用することとし家族で合意の上に行動に出た。実は松岡村の千葉家でも1人1合の給米という慈善を施したがカバーしきれず餓死者も出た。しかも5年になると疫病が発生し、藩内に蔓延して行くことになる。今風に言えば栄養不良の失調症であるから食物を与えるのが前提である。新蔵肝煎は陣屋からの借金のうえに、院内鉱山の精錬用木炭を焼成しそれを運送することを計画し、村人に労働と賃金とを与える方途を考え出す。

千葉家の兄勇蔵が、松岡鉱山で精錬用木炭が不足している実態を熟知していて、その情報を弟は正しく把握し有効に対応したのである。でも製炭と輸送の権利を認可されるためには坐して待っていては何も得られない。27里の道を久保田の藩庁に出頭して許可を得たのである。鉱山当局に於いても陣屋の役人が新蔵を理解して書いて呉れた銀山詰合志賀泰蔵宛の添状などが効を奏して、支配人山崎権六たちが対応、初めての木炭10貫目200文だったのを300文に値上げし、更に4年12月下旬には800文に上げた。

800文のうち600文は炭焼きの人々に200文は運搬する人々に与え自身は1文も取らなかったというから、その清廉な慈愛心は村人は勿論、時に応じて協力させて貰えた隣村の人々をも感化するに充分であったと考えられる。

更に5年になって村人にも多くなった疫病には、湯沢住の医師吉田三伯の理論を用いて、白米2升を粥にして7日間1日2～3回病人に与えるという粥療法に依って治癒を齎したのである。藩はこれを賞し一代苗字を許可した。

6年(1835)10月には村人を寄り会わせた。集合した人々を前に彼らが借用していた米250俵・金2460両の証文を焼き捨て、皆の債務を免除したのである。やがて恩恵に感じた村人は院内銀山への木炭の価格が上がり10貫目で1貫500文になったので、他村の請負世話人の様に10貫につき300文の手数料を収めて欲しいと申し入れたが、彼は承知せずようやく100文を手にすることで妥協した。900文は炭焼き人、500文は運搬人、100文は肝煎という分配になる。この間に今も有名な門屋養安との交際も生じた。

天保７～８年では彼の請負量は25万貫に達したし、運搬用に提供した持馬３頭分の賃料も加算されることによって、巨額の負債を完済することが出来たのである。100文の手数料の計が2500文で、馬の稼ぎが3000貫文だったという。肝煎として村の借財1580文と彼が心を痛めていた高橋家の田畑山林抵当の借財も完済したということになる。

天保12年（1841）新蔵は既に久保田藩の雄勝平鹿荒蕪地開墾係であった。新蔵は、区域内を巡回指導して374石相当の耕地開墾に成功していたのである。数え年39歳であるから江戸時代後末期の認識では立派な大肝煎だった筈である。

弘化２年（1845）実績を評価された彼は「雄勝郡横堀村親郷肝煎」に任命された。活動を続ける４年に74歳の実母を失い58歳の兄勇蔵を失った。悲しみが契機となったのであろう名を「常作」と改めた。恐らく悲しみに打ち勝つべく一層精進したのかもしれない。藩庁もそれを認めた。５年には苗字永代御免となった。もう子孫も苗字を称することが許されたのである。

嘉永２年（1849）47歳を数える常作は初孫理造の誕生に恵まれた。貞蔵とサヨの子供で後年若くして肝煎になり、明治制度の戸長から村長を勤めることになる。常作は嘉永３年には藩の命令で仙台・伊達・二本松・白河・高崎・七日市・館林・宇都宮・大田原・今市等を巡って、農事視察を行った。当然成果は大きかったと思う。

安政３年（1856）木版『除稲虫之法』（12頁）２万部刊行した。それは除草などせずに虫が稲と草の間を行き来する間に稲を育てるという方法なので、当時普通で当局も認めていた方法であった油を田に入れることで害虫を殺す方法を、公然と否定したことになる。彼は信念を持ち農業を士魂で行っていたということを示すものであろう。

文久３年（1863）一つの印象的でしかも歴史的意味を持つ出来事が起こった。雄勝郡内だけではなく広く「川連漆器」で知られる川連の名産業にも関係する豪商高橋利兵衛家に、19歳の石川理紀之助が奉公していたのである。実際には未だ奈良力之助の名であったが、本家奈良喜兵衛家の次女イシとの縁組に不本意で家を出、江戸にでも向ったのであろうが懐中２朱（１／４両）ばかりだったので、十文字辺で無一文になり出会った僧侶の助言で利兵衛家に奉公したというのである。

菅江真澄の歌などにも縁があり歌作を好む力之助は、近くに住む女流歌人の後藤逸女に歌を習った。さらに逸女を介し42歳年上の常作の指導を受ける機会があったというのである。力之助は桑崎村の円太郎家に短期間奉公し常作から夜は指導を受けたということである。力之助は２年後に石川理紀之助になるが、この石川が明治県政の段階で老農高橋正作の指導を受けることになる契機は、ここにあったのである。この頃は既に常作は帯刀御免二人扶持の身分になっていた。

元治元年（1864）久保田藩から3000文の褒美が与えられた。長年の行政・農政の功績を賞されたわけであるが、村の為に肝煎の役料を元に「玄米4俵」を備蓄したことが、直接の対象であった。そして62歳の常作は桑崎村と親郷の横堀村との肝煎役を退任した。

慶応４年（1868）養父理右衛門77歳・養母ろく71歳が逝去した。数え年66で常作は正作と改名した。藩主に「常姫」という姫がいたので憚って改名したという説もあるが、何れにしろ稲作なり農作なりなりの百姓の仕事を、常に行う年齢や立場から、正しく行うというところに移行したことを示すのかも知れない。この年に元号は明治に変る。村のための備蓄米は100俵増えて「千百俵」になったので郷倉（ごうそう）を私費で建てる。

明治４年（1871）は近代日本にとって藩政から県制に変った時である。県から「四木取立世話方」という林務課の顧問指導官のような職務を与えられた。69歳は当時では老人であるが、県内を巡って有用な桑・漆・楮・茶の四種の樹木の植立て育成の指導に当たった。この年６月曾孫も生まれた。家の後継については満点の充実感を持つことになったと思われる。明治４年12月に発令され最初の正式秋田県長官となり、５年２月に赴任の島義勇権令も、５月には四木と紅花・藍・麻の三草の保護令を発布する程であるから、行政的には重要な職務であった。

11年には初めての種苗交換会が開かれる。主導の立場にある石川理紀之助は明治５年から県庁に吏員勤務をしていたが、12年勧農係として4人の

老農を御用係に登用した。北秋・山本・鹿角担当の岩沢太治兵衛、南秋・河辺担当の長谷川謙造、由利・仙北担当の糸井茂助、雄勝・平鹿担当の正作である。77歳の彼は月の半分位の実働で指導に当った。

14年(1881) 8月21日明治天皇の巡幸で、県南端の行在所は、下院内の斎藤家であった。彼は其処に伺候し、有栖川宮熾仁親王から褒詞を受けた。12月6日から20日にかけて八橋村で第4回「勧業談会」が行われた。会頭は理紀之助、助言者は4人の老農で、談話者は勧業課員と各地の勧業係など54人であったといい、9日朝に正作は刈和野自由試験場担当人から助言を求められ、自分の発明した葡萄の「挿し木薬」を教示したという(前出「飢饉との闘い」)。

ここで筆者が非常に興味をいだいたのは、「土用中に韮の搾り液を取り、石灰に混ぜて、干して硬くする。それを砕き、粉末にして保管。挿し木をするとき、切り口の前後に、その粉末を塗ると、枯れることがない。これぞ挿し木の妙薬だ」と正作が示すと、理紀之助が「韮液と石灰の配合は、いくら程か」と質問し、即答して「たいてい韮液一升に石灰一合の割合だ」と言ったという場面である。明治という時代の経験と科学の実相が見えて来て人間性豊かな社会が、懐しく、心暖まるのである。

18年に米価が下落し種苗交換会が19年に「農話連主催」になっていたが、こうした結束があったので、20年(1887) もその形で実行され、幹事は岩沢・長谷川・正作で、会計は森川源三郎と茂木亀六であった。尚20年の終了日には佐藤信淵・栗田定之丞・渡部斧松ら先人15人を祭ったが1人県外の植木四郎兵衛が含まれていた。正作の米沢の師であるから彼の報恩精神の強さも知ることができる。

21年小歌集『老の田うた』を出す。玄孫常作の生まれた年でもある。実は明治18年83歳の折石川理紀之助が、責任者で出版の大册『農業随録』の和歌化であった。著作は少なくない。23年(1890)『飢歳問答』、25年『長寿自養篇』翌年『鶴亀寿齢之事』等であり、歌人としても実績があった。

24年11月14回種苗交換会に、電報で招かれ89歳の身で八橋まで27里を歩き出席し問に応答した。健脚は心身健全の証である。

敬神の念の強い正作はこれより5年前の明治19年84歳で念願の伊勢神宮参拝を達成した。殆ど歩き通したという(『道中日記』)。驚異的な体力であるが、思うに気力も卓抜だったのであろう。86歳で東鳥海山に登った。そういう素地があってこそ27里が完歩できたのである。

26年3月17日県庁に来るように言われ曾孫周慥を代理に出すと緑綬褒章の下賜があった。9月にはまた東鳥海山777.4メートルに周慥と登った。

明治27年(1894) 6月23日聖健の老農高橋正作も老衰の為に永眠した。享年92。縁深き石川理紀之助の主唱により県内92箇所で追悼祭が行われた。